

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

虎の門病院下部消化管外科での研修を終えて

獨協医科大学上部消化管外科

井原 啓佑

この度、日本臨床外科学会の2023年度国内研修制度を利用させていただきまして、2023年10月2日から10月13日までの2週間、国内留学する機会をいただきました。

自身の手術手技向上のために、多数の症例で最先端の治療を実践されている施設で、トップレベルの手術に触れたいと日頃より思っておりました。また、以前に内視鏡技術認定医取得に向けたビデオクリニックで黒柳洋弥下部消化管外科部長のご指導を受けさせていただいた縁もあり、日本臨床外科学会国内研修の数ある素晴らしい選択肢の中から、国家公務員共済組合虎の門病院下部消化管外科での研修を希望致しました。

研修期間中、13症例の大腸癌手術があり、手術室での3D術野モニターを介しての説明と解説によるご指導を賜りました。神経ガイドを意識した手技が徹底され、常に正しい層で進行し、それらがチーム全員で定型化され共有されていることに驚きました。出血が全く生じず、手術がよどみなくスムーズに進み非常に低侵襲であることを感じました。また、黒柳先生の妥協のない説得力のある指導の中には手術への考え方やコツが豊富に盛り込まれており、それらを拝聴することができ、とても勉強になりました。

直腸癌手術においては直腸間膜剥離時のA層・B層の見分け方や、どの領域で交通させ、それによりしっかりと神経の温存が視認できるることなどの有用性について、膜を介した脂肪組織の解剖学的所屬を瞬時に判別し、適切な剥離層を同定後、横に広く同一な層をつなげながら剥離することで正しい層での連続した剥離方法、「白黄色境界」での境界に沿った白色層の切離など、層と層を跨がず正確な手術を行えるようにするための工夫を教えてくださいました。

大腸癌手術においてはロボット支援下手術が全盛となっている現状においても、腹腔鏡手術で積み上げてきた局所解剖と剥離層同定のための解剖学的認識、正しい剥離層を維持する技術は重要であり、これからも研鑽を続ける必要性を感じました。

卒後3年目以降、10年目未満のレジデント、フェローの先生方の執刀も多く、剥離ラインや郭清、残存および再建腸管の血流等について逐次前立ちや外回りのスタッフの先生から指導されながら、手術されておりました。道具、視野展開、手技が統一されており、集中的かつ繰り返し行うことでの手技の習熟度は高く、正確な型を覚える段階で手術を学ぶ素晴らしい環境であると感じました。また、病棟業務・検査・外来診療など多忙を極めるなかで、時間を見つけては手術動画を複数名で見ながら意見交換を行う様子に感銘を受けました。

2週間という短い期間ではありましたが、やはり間近に体感するということがいかに重要であるかをこの国内研修で実感しました。自施設での経験のみでは体感し得ない、国内屈指のhigh volumeセンターでの手術への緊張感や熱意は私の心を強く刺激し、今後の外科人生に大きな糧となりました。

最後に、この場をお借りして黒柳洋弥部長をはじめとした、虎の門病院下部消化管外科の皆様重ねて御礼申し上げます。また、このような素晴らしい機会を与えてくださった、日本臨床外科学会の万代恭嗣会長ならびに国内外科研修委員会の高山忠利委員長をはじめとした同委員会関係者の皆様、ご推薦いただきました栃木県支部長の尾澤巖先生、獨協医科大学上部消化管外科の小嶋一幸教授、中村隆俊教授、快く送り出してくださった当科教室員の皆様にも厚く御礼申し上げます。